総評

言語芸術朗読コンテスト審査員長　松本 健

第８回言語芸術朗読コンテストにご参加くださいましたみなさま、どうもありがとうございました。例年ですと表彰式の際に総評を申し上げているのですが、今回はその機会もなくなりましたので、ここで述べさせていただきます。

第一次審査の課題文は江戸川乱歩『怪人二十面相』の冒頭部分でした。この少年少女向け冒険推理小説の始まりは、あたかも講談のような文体で語られるわけですが、そこにどのようなワクワク感を醸し出させてくれるのか、ということに期待を込めた選定でした。

そして本審査の課題文は、井上靖『天平の甍』の終局部でした。第九次遣唐使船で唐に渡った留学僧たちの激動の 20 年を描いた小説であり、課題文はその 20 年を経て帰国を果たした主人公が、あるきっかけから激動の日々を振り返る静かなクライマックスともいえる場面です。

台詞もなく、大きな動きもないこの場面に、どれだけの背景を含ませることができるのか、どれだけ静かな感動を呼び込むことができるのかという、第一次審査とは対極に位置する表現技術に期待を込めた課題文でした。

本審査出場の 11 名全員が、その期待にそれぞれの個性をもって応えてくださり、たいへん感銘を受けました。得点は拮抗したものとなり、最終順位は「総合力」に基づいた結果としか説明のしようのないものだったといえます。

審査会議では、それぞれの魅力が挙げられる一方で、共通してあらわれやすい以下のような課題点にも言及されました。

①表現したいという気持ちと、聞き手を意識した表現・技術というものとの間にギャップが生じやすい。

②難しい言葉（名称等）が出てくる文章の場合、聞き手が理解できるようにその言葉を立てる（際立たせる）必要があるのだが、急いで通り過ぎやすい。

「聞き手」を意識するということは、朗読の本来の目的に沿った基本的な姿勢ではありますが、その実践（バランス）はなかなか難しいものです。しかし、またそこにこそ無限の可能性が秘められているともいえるのでしょう。

今年も第一次審査からたくさんの魅力的な声を届けていただきました。来年は例年通り福岡女学院大学の会場で本審査が行われることと思います。みなさまのご参加を心よりお待ちしています。